



# ぱぶりけーしょん

事務局 北海道医療ソーシャルワーカー協会  
札幌市中央区南4条西10丁目  
北海道歯病センター内  
<http://www.hmsw.info/>

## 「他団体・組織との協働による医療・介護連携活動 ～中央D支部の取り組み～」



道央病院  
MSW 佐久間 聡

### はじめに

介護保険制度創設から10年が経過し、「医療と介護の連携」が重要視されていますが、「連携」についての考え方や手段が個々で異なり、必ずしも円滑に連携できているとは言えない現状が見られます。

その中で、私たちMSWは病院間連携や在宅関係者との連携における病院側窓口であり、地域の連携構築にあたって担う役割が重要であることは確かです。北海道医療ソーシャルワーカー協会では「顔の見える連携」と「医療・介護のまちづくり」をキーワードに、市(区)町村単位で地域の実状にあわせ他団体と協働し活動を展開している地域があります。ここでは、私が所属する当協会中央D支部での活動を報告します。

### 活動の目的

北海道医療ソーシャルワーカー協会は、9つの支部によって構成されており、中央D支部は、札幌市厚別区・清田区・北広島市・江別市・恵庭市・千歳市・岩見沢市・夕張市などと該当地域が広いです。

その中で「医療と介護の連携」を考えるにあたり、各地域の実状にあわせた、連携を構築して行かなければならないと感じました。そして、地域には「医療と介護の連携」を意識し活動している団体・組織は複数ありますが、個々

に活動しているため効果的な連携が出来ていない現状が散見されました。

そこで、団体・組織を超えて協働することで、共通の認識を持ち、より効果的な連携を可能にすると考え、その環境づくりを目的とした活動を市(区)町村単位で行っています。

### 各地域での活動報告

【厚別区】中央D支部のなかでも急性期病院が多く、他地域からの入院も多い。そのため厚別区の連携構築が中央D支部のなかでもとくに重要であります。ここでは当協会中央D支部、札幌市介護支援専門員連絡協議会厚別区支部、札幌市厚別区第1、第2地域包括支援センター、

札幌市介護予防センター厚別西<sup>さいとう</sup>を主要メンバーとして「病気を患っても住み慣れた地域で安心して生活できる」

という目的で、「あつべつ箱もの<sup>プロジェクト</sup> P<sup>+</sup>J<sup>+</sup>®」を結成。専門職の相互理解を深める活動から徐々に垣根を越えた連携を模索しています。H21年より7回の研修を実施し、初年度には、「在宅情報提供書」「退院時情報提供書」の一案を作成、提示しています。

## (2)医療福祉情報

【清田区】「清田区在宅ケア連絡会」において、中央D支部の他地域での経験を導入して、「安心して入退院できる清田区を目指そう」というタイトルの研修会をH23年10月に開催しました。今後も継続して「医療と介護の連携」を地域課題として共に取り組むことになっています。

【北広島市】H19年に「地域住民が安心していきいきとした生活が送れるよう地域レベルの活動を把握するとともに、専門的サービス提供機関との連携システムを構築する」を目的として「石狩地域リハビリテーション推進会議 北広島懇談会」が発足しました。その戦略メンバーとして当初より協会員が参加。研修会の実施や千歳との「共通情報提供書」の作成を行っています。H23年からは、地域住民に対し医療と介護の正しい知識の習得を目的とした住民学習会を開催しています。中央D支部からの出張講師派遣や、地域のMSWを社会資源として活用してもらうため「中央D支部会員名簿」の配布などを通し、市民へのMSWの啓蒙にもつながっています。

【恵庭市】H17年より、現在の活動の土台となる「顔の見える連携」の研修会を毎年行っています。H22年からは、恵庭市介護支援専門員連絡協議会と協働し、研修の企画・

講師派遣を行っています。また、「共通情報提供書」の作成・導入に関する意見交換も行っています。

【千歳市】協会員が会長となり市内のMSW、ケアマネジャー、看護師等の有志で構成する「ちとせの介護医療連携の会」を立ち上げ、入退院における情報交換のガイドラインの作成や共通情報提供書の作成を行っています。

### 活動のまとめ

以上の活動は複数の地域において医療・介護連携システム構築の中軸を担っており地域に活動が浸透してきていると実感できます。また、最近では市民レベルでも医療・介護連携は注目されてきています。

ここまで活動を展開できたのは、協働することにより地域にかかわる専門職が共に地域の実状を把握し、そこに生じる課題に対し共通の認識をもち取り組めたからであったと推測されます。

今後は更に他地域に活動を広げ、全道的な広がりとなり、職能団体として地域に貢献していきたいと考えています。そのためには、日常業務は当然のことながら、地域の中のMSWであることを自覚し、社会へ向けての働きかけをも意識できる、そのようなMSWがより多く育つような土壌づくりが必要と考えています。

## “「連携から発展へ」”

～きっかけを作ってくれたMSWの方々に感謝をこめて～

札幌市介護支援専門員連絡協議会  
厚別支部 支部長  
居宅介護支援事業所 かりぶ  
所長 原田哲也



介護保険制度にケアマネが担当する高齢者が入院した際に在宅での情報を病院に提供した場合、退院前に病院スタッフから情報提供とカンファレンスをしていただき、それに基づいてケアプランの作成を行った際に連携加算がつくようになって数年がたちます。今までやっていなかったわけではありませんが当時、制度化されたことにより色々な思いがケアマネの間に走ったのではないかと思います。

ます。ようやく自分たちの仕事が評価されると思ったケアマネもいれば、「また帳票類が増えたのか、日付や内容など実地指導の際に細かく言われるなら取らない方が無難」と思ったケアマネ。制度解釈を深く読みすぎて堂々巡りで、何から手を付けて良いのかわからなくなる。逆に浅く解釈すぎて一泊二日の白内障の手術や2～3日の検査入院でも加算が取れるのでは、など色々な思案を巡ら

巡らせ右往左往していたのではないかと思います。

私の所属している居宅事業所でも最初は相手方の病院スタッフに分かりやすく情報が伝達できないかと簡単な記入用紙を独自に作成し、それを持って厚別区内の入院設備がある病院を回り「いかがでしょうか、読みやすいでしょうか？担当する先生にとっては読みやすいでしょうか？」などと聞いて回っていました。しかしそれもMSWが配置されている病院だけで、それ以外の病院は「自分たちの行動を理解してくれるだろうか？」「取り合ってくれないのではないだろうか」の不安から赴く事もせずに経過していました。

その内、どこかの居宅事業所に実地指導が入り、退院時の加算の書式が不十分で介護報酬の返還をさせられたなどの尾ひれのついた噂が流れ、耳にした時には連携をとっても、請求しない方がまだ、自分一人のミスが事業所全体に響く、そんな責任の重いものであれば連携自体がどうか？との考えも過ったのも事実です。

そんな迷いがあった時に声をかけてくれたのがMSW協会と厚別区の包括支援センターでした。「厚別区リハビリテーションチーム会議」として会が発足。入院中のリハビリを退院後、在宅で展開する方法と連携についての会議でした。ケアマネが普段感じている病院への勝手なイメージを払拭させてくれるような研修会の開催、最初は厚別区内だけでもいいので同一の書式の作成と活用など、MSWが共にあるいは一歩先を先導して会を進めてくれました。

会議と研修が重なるにつれて「顔が見える連携と情報交換」が取れる様になり、退院前の病院でのカンファレンスでも「退院後は介護保険サービスの 回、利用してみては」との病院からの提案に対し、「初めての介護保険サービスであれば回数より徐々にサービス導入から慣れて

いただいてはいかがか」などケアマネとしての発言の場をMSWの方が提供してくれました。在宅のケアマネとしての専門知識や経験を活かし伸ばしてくれる、初心に戻って高齢者が安心して生活が出来る権利を考えさせてくれた良いきっかけを作ってくれたのではないかと思います。目で見える連携、つながる支援の内容確認が本人、家族にも提示できた事も良かったのではないかと思います。

「これ以上、介護度が下がるとサービスが入らなくなり自宅での生活が危くなる、認定調査の時に同席、助言するほかに、作ってくれた連携時の書式を用いて意見書を書いてくれる病院に情報を送って参考にしてもらおうかと思っています。」

「本人の自宅での状況を前もって病院に提供して、外来受診の際に役立ててもらおうと思っています。」

最近こんな発言をしたケアマネに会いました。帳票類の作成や訪問業務、細かい調整に忙殺されやすいケアマネ業務で、なかなか前向きになれなかった時期も過ぎ去って、在宅で生活されている高齢者の身の安全や権利擁護の気持ちの向上にもつながっているのではないかと感じた瞬間でした。

「退院してからサービスが導入されて、その後の自宅での様子を聞かせて欲しい。病院としても入院中に在宅を念頭に置いた看護や介護、リハの内容など、今後の対応を考える材料になるので。」入院病棟に勤務する理学療法士の方から最近聞かれた言葉です。退院後の結果を返すやり取りはこれからになるかと思いますが、これから先、病院と地域福祉の発展と貢献の相乗効果がMSWの方と共に進めていけたらと思っています。

## “「あつべつ箱ものPJ®(プロジェクト)

### のあゆみ”

札幌市厚別区  
第1地域包括支援センター  
主任介護支援専門員 山端静香



「はこもの」ってなんですか？

研修会の案内を渡す際や参加される方々に質問されます。その都度、以下のように説明しています。

現在の名称に変更されたのが平成23年3月、メンバーの

ひとりが「厚別区をひとつの大きな箱ものに見立て、そこに暮らす人が入院して自宅に戻っても、不安なく住み慣れた地域で生活できる」イメージで考えたらどうだろう？

#### (4)医療福祉情報

と提案したことからです。箱ものPJ®究極の目標でもあります。

このプロジェクトは平成21年4月に発足したのですが、前身は「厚別地域リハビリチーム」(厚別区地域リハビリ研究会)という名称でした。きっかけは、ある研修会で北海道医療ソーシャルワーカー協会中央D支部長である、新さっぽろ脳神経外科の上田主任より脳卒中モデルの視点から、厚別区地域包括支援センターより廃用性モデルの視点から、それぞれ地域リハビリについての発信があり、それならば連携しましょうと手を結んだことでした。

高齢者になると、入退院を繰り返すことが多くなります。入院時は医療スタッフが、退院すると在宅のケアマネジャー等が中心となって、そのかたを支援していきますが、専門職同士が互いの仕事や役割を理解し、顔のみえる関係にあると、ちょっとした「頼みごと」をしやすくなります。例えば、私がケアマネジャーとして働くとき、強く実感することがあります。それは薬表やりハビリ情報を提供いただくときに、顔がわかる関係だとスムーズ情報交換ができるということです。深く、密に連携できていれば結果として、利用者さんの利益となりプラスに働くのではないのでしょうか。しかし、何度も何度も「どうして連携が必要なの？なぜ研修をするの？」と基本に立ち返っていかないと研修すること自体が目的となってしまいます。包括支援センターとして「地域包括ケア」を実現していくために、このプロジェクトの果たす役割を考えて参加したいと思います。これまでの取り組みを紹介します。

・第1回(21年6月9日)入退院時情報提供書をスムーズな連携のためのツールとして活用しましょう

セラピストや看護師、MSW、ケアマネジャーと同じ机でグループワーク(GW)をしました。

・第2回(21年11月10日)「お互いの違いを知る」ため事例を用いて、入院時、退院時にケアマネは、MSWは何を望むのか、どんな情報があれば良いのかを意見交換しました。

・第3回(22年6月16日)平成22年度の診療報酬改定で介護支援連携加算が取れ、連携が重要視されるなど今後の動向について学びました。

・第4回(22年9月21日)地域のセラピストと接点を作りたい！ どんなときに訪問リハビリを利用したら良いの

か？厚別区内の訪問リハビリ事業所の取り組みや意見交換を行いました。厚別区地域ケア連絡会との共同開催で67名の参加がありました。

・第5回(23年2月22日)千歳、北広島、岩見沢、厚別それぞれの地域の取り組みを発表、現場で生かせる内容がありとても参考になりました。

・第6回(23年8月26日)「安心して入退院できる厚別を目指そう」～プロがばらばら、そりゃイカン！

退院時カンファレンスについての多職種意見や立場について、再度グループワークを行い、理解を深めました。

・第7回(23年12月6日)「伸ばせるQOL～訪問リハビリ活用法～」と題し、第1回目同様、GWを行いました。

複数の団体が関わっているため、時間の調整をし、時には勤務後に集まって研修の企画をします。

しかし、何度も話し合いを重ねた研修企画により企画者側が顔の見える関係となり、関係が密となることができたこと、その過程が大事だと感じました。まさに顔の見える関係づくりによって「医療と福祉の連携」が実現していくのだと考えます。

「すべての医療機関にMSWが必要である」これは現場にいる専門職であれば誰も思うことでしょう。

それはなぜでしょうか。情報の交通整理が他者との連携には重要となりますが、MSWが医療機関におけるその役割を担うものと期待されるからだと思います。

一方、地域包括支援センターは地域連携での交通整理役を期待されていると考えられます。MSWの職能団体である北海道医療ソーシャルワーカー協会中央D支部と厚別の地域包括支援センター、また、札幌市介護支援専門員連絡協議会厚別区支部など他の職能団体とも手を組んだこの取り組みは情報の共有を、まさにひとつの「箱もの」として行うことが可能となり、さらに情報共有だけでなく「箱もの」全体で次にどのように行動することが地域包括ケア、シームレスケアを達成するために必要であるかを考え、実行することもできるようになっていくと思います。

「あつべつ箱ものPJ®」はそのような動きを可能にするために立ち上げられ、厚別区における地域包括ケア達成の重要な取り組みになりつつあると考えています。

